

505
8

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10¹⁹ 11 12 13 14 15

始



505-8



童話新集
お鶴の九官鳥
順三郎著

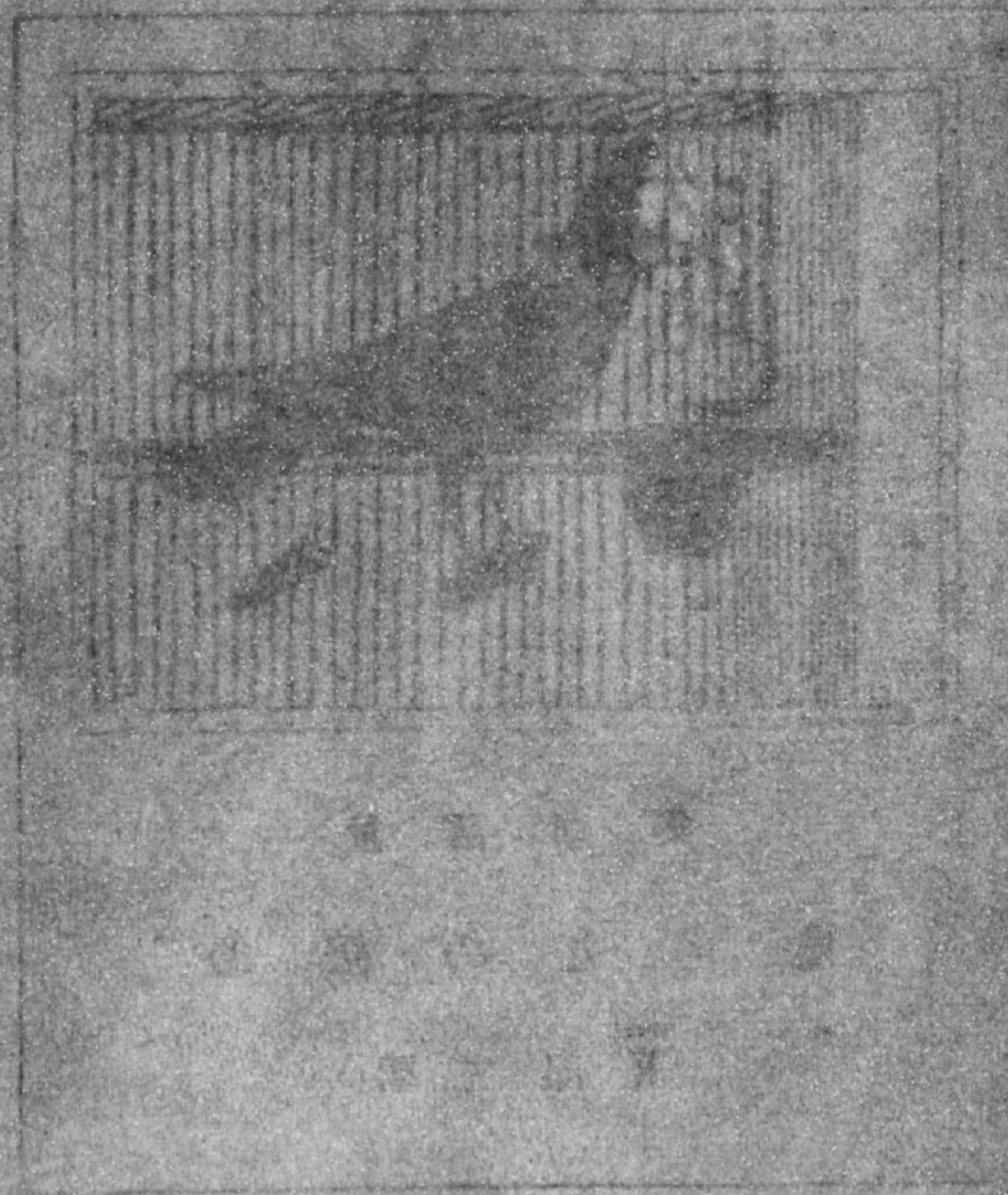
お酒を飲んだら
酔っぱらつて
太鼓の音が
ドドロコドン
お酒は飲まず
勇ましく
叩く太鼓は
トントコトン

少年鼓手の決心
童話

大正
10 12.17
内交
正男作



心決の手鼓年少



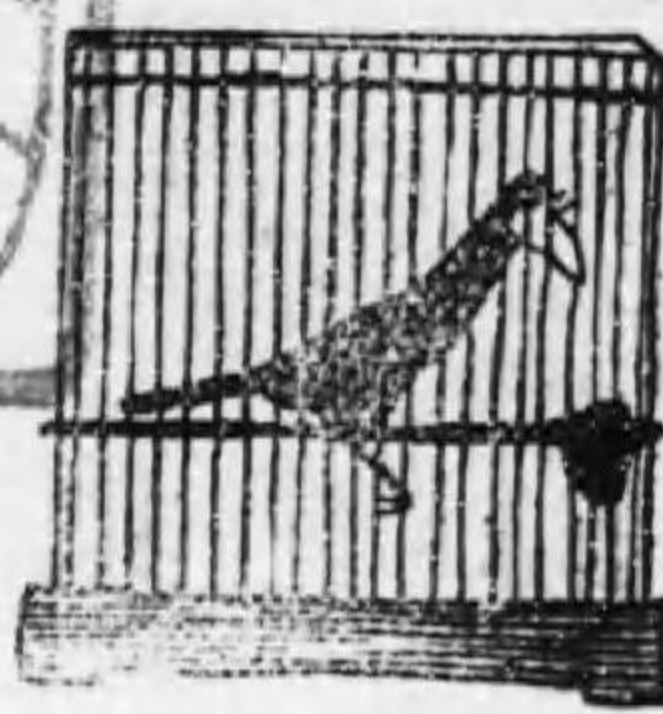


見 出

- 1 屑拾ひの與一 (頁二)
- 2 少年密使 (挿書) (頁一五)
- 3 夏子と冬雄 (頁二六)
- 4 少年鼓手の決心 (口繪) (頁三〇)
- 5 伶俐なヘツチ嬢 (挿書) (頁三五)
- 6 孝行準一 (頁四六)
- 7 嘘つき小僧の八助 (挿書) (頁五二)
- 8 妹の心願 (頁五八)
- 9 人喰ひ亭主 (頁六六)



- 10 少女ゲルドリユーデ(挿書)(頁七二)
- 11 無智松吉(挿書)(頁八六)
- 12 ジヨン君の義侠(頁九五)
- 13 秋子のなさけ(頁九八)
- 14 摘食の菊子(頁一〇〇)
- 15 憐れマツチ賣よ(挿書)(頁一〇四)
- 16 朝寝ぼうの春吉(挿書)(頁一〇七)
- 17 お鶴の九官鳥(頁一二四)
- 18 驚攫ひ(頁一二四)



童話 お鶴の九官鳥

順三郎著

屑拾ひの興一

東京下谷の萬年町と云ひますと、誰でもよく知て居る通り澤山の貧乏人が集て居る所であります、其處へ行て見ると、三疊敷の様な小さな部屋に三人も五人も頭を並べて、ゴロ／＼と寝て居りますから、それは／＼目もあてられない様な有様であります。

屑拾ひの興一



だが此町に住で居る者は皆多くは貧乏人に違ひありませんが、其中にはなかく氣高い立派な思想をもつて、金持なぞの及ひもつかぬ感心な者があります。

此處に山中と云ふ七十を越た老人が與一と云ふ十四五歳の子供と三疊敷の小さな家に、暮して居りますが、此與一は實になかくの伶俐者で、毎日朝早くから大きな籠を背負ひまして、遠く京橋から日本橋邊まで紙屑拾ひに出掛け、其賣上のお金でやうく老人を差へて居ります。

ところが此與一は紙屑拾ひの子ではありますけれども



實に立派な精神を持つて居りましたので、小學校を卒業した後は、どうかして中學校に行き、相當の智識を得て何か勤め事をなし、此老人を楽しく餘生を送らせやうと思ひました。

毎日拾ふ紙屑の中から英語の書いてある紙切や、雑誌や新聞などが出ますと、夫を大事に拾ひ上げて、家の中の壁にはりつけ、毎夜遅くまで獨學したのであります。又冬になつて町に夜學が始りますと、終日働いて疲れ果たのにもかゝはらず、毎夜通學してよく熱心に勉強するのを怠らずに、雨の夜も風の晩も雪の宵も決して休むこ



とはありませなんだ?』
 だから近所の人々はその利巧者が云つて、誰も褒め
 ない者は、一人もありませんが、興一は實に勤勉で
 熱心で我慢強い然かも志の高くて確い子供であつたので
 すから、お金の澤山あつて學校に自由に行かれ、勉強の
 出来る子供等は、ほんとに此興一をよいお手本させなけ
 ればならなかつたのです。

『何うしても中學校に入るには、英語が必要だ!』

斯う日頃思て居りましたから、拾て來た古本に注意し
 て居りますと、其中から英語の初等科の講義録の古の一



部を見付たので、雀躍して喜び、毎夜々々夫を勉強した
 から何程か英語を知るやうになりました。

然し斯様な事では、まだくいけないと思ひましたの
 で、或古本屋から苦心してためた貯金で英語の獨案内を
 買求めて熱心に勉強いたしました。すこしは前よりも英
 語を読むことが出来る様になつたので有ります。

或日のここ新聞の廣告を見ると或中學校の生徒募集が
 あつて、英語の選抜試験に及第した者は毎月十圓宛の獎
 學金が有るとしてありました。

是を見た興一は大層喜びましたが、どうがして其獎學

金を得て、中學校に入りたいたいものと考え、寝ても起きても其事ばかり思ひ、暇があれば、ひたすら英語を獨學びして居つたのです。

愈々四月七日の午前九時になつて、與一は其中學校にまゐりますと、およそ三百人ばかりの學生が試験を受けるため、早くから押掛て居りました。

『おや！』

夫を見た與一は非常に驚きました。

『たつた一つの奨學金を得るために、三百人とは實に驚いた！僕のような獨學で英語を學だ者が、何試験にバツス



せやう！是は駄目だ！』

斯様思ひましたから、止めやうとしましだが、

『いや！驚くには及ばぬ！神の助けがあれば僕も及第せぬとも限らぬ！』

氣を持直して、大膽にも其三百人の中に加り、英語の試験を受けました。

中學校の先生は此三百人もある受験者を學堂に集めて、一枚の英語の問題を與へ、三十分間に其問題を譯することを命じました。

すると此三百人の中で問題を見て大層失望した者は二



百三十四人もありました。

「是れはとても駄目だ！」

斯様言ひながら中には、學堂を出て行く者がありましたので、残た者は僅か五六百人ばかりでありました。

此答案は三十分間に美事譯し終て差出した者は、全く與一只一人でありましたから、先生は其技倆を見て只驚たばかりでなく、

「夫は、獨學で……」

と聞て非常に驚たのであります。

澤山集た三百人の中で美事及第して、毎月奨學金を貰



ふやうになつた者は、與一只一人でありましたから、丁度鬼の首でも取つたかのように喜び勇で我家に歸りました、老人は三四日前から、流行性の感冒にかゝつたのが元で、肺炎となり、今にも息を引き取らんとする、實に危い處なのであります。

與一は驚て其老人の耳に口を當て、

「お父さんく！何卒ぞお喜び下さい！あの試験に及第して美事奨學金が取れました！」

と大聲に言ひますと、其老人は苦しい中にニコく笑ひながら、





「あゝ、左様であつたか！今迄苦しい中に祈りづめに祈
て居つた！。私は夫を聞いて何も思ひ残すことはない！。』
斯様云つて喜ぶのでしたが、また何か言ひたい様子で
ありますから、

『お父さん！確りなさい！お父さんお氣をたしかに！』
と申しますと、老人は苦しい中に僅かに目を開き、

『與一や！今息を引取る前に、一言申残したいことがあ
るよ！』。

と云つたが、水でもほしさうですから、與一は茶碗へ
水を一杯入れて、夫を老人の口の中へ注ぎますと、



「グツ、」

と一息に飲み干して、

『與一や！夫は外でもないが！。』
と次の様な物語を致しました。

『今迄貴方は私を實の親と思つてお居てになつたが、何
をかくしませう。私は貴方のお父様のお宅に永らくお世
話になつた、下男の市藏と云ふものです！。』

「エツ！」

與一は目を丸くしたのであります。

『貴方のお父様は大層立派な金持の家の息子様でした

が、遂お家にいろ！と騒動が出来で、貴方のお父様やお母様は夫れがため大層御心配の餘り、「此子をお前に頼む」と云つて遂短銃で自殺なされました！」

「おや！夫は、ほんごか？」

「私は貴方様をお預り申す時は、何程か金してありましたが、酒飲息子のために皆巻上げられ、其果は家出をされたので、遂々此様な貧乏人となり、紙屑拾ひまで零落したのであります！」

「ウン、それは！」

と與一は老人の物語に大層な不審の眼を開て聞て居り



ましたが、老人は尙ほ

「今日まで貴方は、私を眞の親と思ひ、いろくとお助け下さつた御恩は、私決して忘れませぬ！。私は神様の御手にすがつて、やすくと天國にまゐります！」

「おう市藏とやら氣をたしかに……」

「はい！どうか勉強して貴方は立派な者になつて、亡いお父様のお後を繼で下さい！。是が私の最後のお願いです！。夫につけても私の道樂息子は、何處に何をして今頃は居るやら……」

と云つて、涙に暮れたのであります。



すると門口に先刻から此老人の物語を聞いてゐた男は、ツカ／＼と家の中へ入て、

「お父さん／＼！。あの私が竹藏ですよ！。竹ですよ！。」と老人に取り纏がましたから、

「オ、お前が竹か？」

「はい！ 私が竹藏です！。さうぞ不幸の大罪はお許し下さい！。私は現今芝の豊岡町で小さいながらも荒物屋をやつて、其日の暮しには困りませぬ！。」

「あ、是で私も安心して天國へ行ける！。」と微かな笑を漏しながら、左手に與一、右手に竹藏を



握て、すや／＼と眠るが如く遠い／＼死の國へ旅立しました。

二 少年密使

嘗て支那に拳匪の亂が起て北京は一時なまぐさい戦場の巷となり、殺氣に満ちた事がありました。其時或商店の小僧さんが英吉利の宣教師の學校へ通て居りましたので、大層拳匪から憎まれ、又奉公先からは追出されて、一時は可愛さうにも一命まで取られやうとしましたが、幸福にも其通て居る學校の宣教師に救助れて、英吉利の



公使館の『ボーイ』となることになりました。

ところが亂民の拳匪は間もなく公使館に押寄せて、夫を十重二十重に取圍み攻撃をはじめました。だから公使館は實に危険なのですが、

『天津には我が兵も居る事だから、此状況を知らせて、早速應援の兵を乞ふより外に道はない！』

と公使館の中では相談がまとまつて、夜になつてから三回はかり密使を天津に送りましたが、どう云ふものか一人も歸て来ないのであります。

多分是は途中で敵に見付て捕虜になるとか、又は慘殺



たのでありませう。だから夫からは誰も恐怖て行かうとする者は一人もありませんから、

『斯様なつては、如何する事も出来ない！。どしたら宜からうい。』

とお互に顔と顔とを見合せて居るばかりでありましたが、すると彼の少年は大層元氣よく、

『密使に私が参りませう！』

と申出ましたが、是は先に一命を救助た恩返に功名手柄をしゃうご確い決心をしたものと思はれます。

時は丁度七月の眞夏の暑さ盛り、此勇しい少年は四日



の夜の明方に胴のまはりを太綱で確くゆはへてもらひ、
高さ四十丈程もある城壁の外へ釣下されたのでありまし
た。

是から行く先は天津まで四十餘里もあるのですから、
いつ何處で敵兵に見付られるのか分りませんが、若し見
付たら最後一命は忽ち銃劔の爲に奪はれることは云ふま
でもなく、思へば實に危険の事と云ふよりほかは有ませ
ぬ。

此勇敢なる少年密使は、其身に大層汚れた襤褸をまと
ひ、恰かも乞食のやうに見せかけて、目にも見えぬ程の



細字で書た秘密の書類を少さく疊で桐油紙に包み、是を
欠たお鉢に入れて、其上には残飯の様な食物を盛てたき
ました。だから此お鉢の中には大切な秘密書類があると
は誰しも氣付かれさうもない様に見へましたが、どうし
た事か城壁から下された拍子に其大切な鉢を石に打付
て壊してしまひました。

『あゝ、是は失敗だ!』

今となつて此四十丈もある城壁の上の人を呼だら、屹
度そこらあたりに見張をして居る拳匪の耳に入るだら
う。然し此儘では、直に密書を見付られて、自分の任務





は果されぬだらう。と當惑いたしました。やがてすばやく密書をお鉢から取り出し桐油紙を取棄て、自分の着て居た襪褌を引裂き、其切で秘密書類を中に巻き込み、是を指に巻付て恰かも怪我をしたやうに見かけ、何くはぬ顔で平然と出て行きました。

城壁を離れてまだ物の半町も行かぬうちに、

『止め！誰れか？』

案に違はず拳匪の番兵に呼止められて、手厳しく取調を受けましたが、運よくも怪しい者には見られなくて許されました。だが此密書を手に巻付て居たのでは、何だ



か敵に感付れさうに思ひましたから、其許を受けて出て行くと間もなく襪褌の裾をとつて、密書をよく其中に縫込みました。

北京から天津までの長い間には食物で随分苦みましたが、行々情深い人々の恵を受けて、漸く飢餓を凌でまゐりました。城を出てから二十里程も旅行した時に、とある農家に宿りましたが、此の家の主人は妙な我儘者で、『今召使の小僧がなくて大層困てる處だから、お飯を食はせてやる代りに、俺の家に奉公するがよい！』

ご申しましたから、此少年は若し是に逆らふと疑はれ

少年密使

るかも知れないと思ひましたので、仕方なく云ふがまゝに三日程其處に居りましたが、

「斯様な事に日を経過ては大變！」

と心に叫で病氣だと偽り、大層苦しい様な様子を見せ

かけて、今にも死ぬかと思ふ程「ウンく」呻吟だし轉

げ廻りますと、其主人は是を見て、

「おや、俺の家で死なれては誠に厄介だ！」

斯様言て遂に追出しましたから、此少年は心中で大喜

びだが、さて如何にも苦しき様な様子でよろくとよろ

めきながら歩いて立出でました。然し其家がもう見ぬな



童話

少年密使

正男作

ボロ着た小僧は
乞食の子？
フラ／＼歩いて
何處へ行く
かけたお櫛に
密書いれて
大事な御用に
行きますの！



少年密使

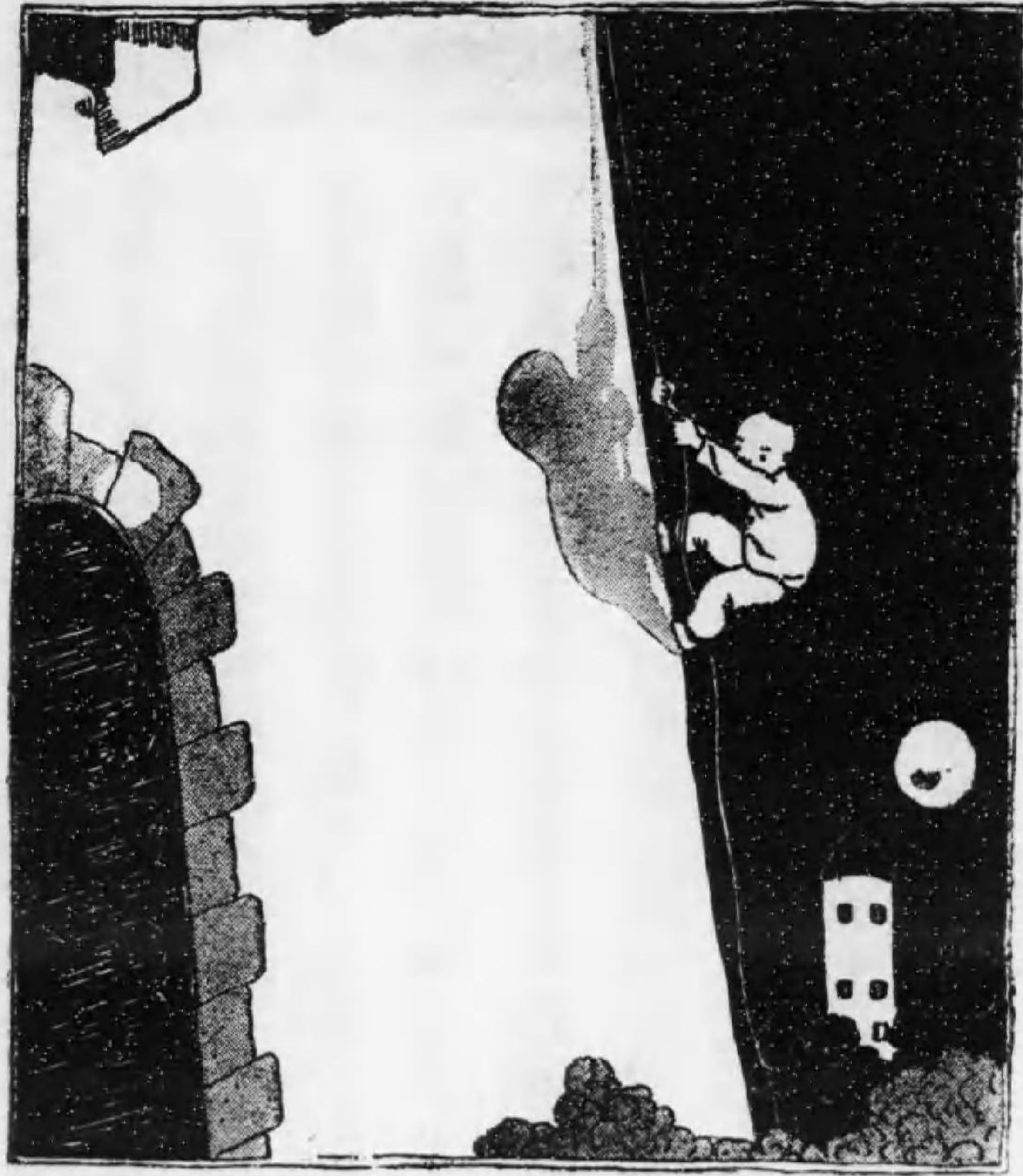
るかも知れないと思ひましたので、仕方なく云ふがまゝに三日程其處に居りましたが、

『斯様な事に日を経過ては大變!』

と心に叫で病氣だと偽り、大層苦しい様な様子を見せかけて、今にも死ぬかと思ふ程『ウンく』呻吟だし轉げ廻りますと、其主人は是を見て、

『おや、俺の家で死なれては誠に厄介だ!』

斯様言て遂に追出しましたから、此少年は心中で大喜びだが、さて如何にも苦しうな様子でよろくとよるめきながら歩いて立出でました。然し其家がもう見ぬな



童話

少年密使

正男作

ボロ着た小僧は
乞食の子?
フラく歩いて
何處へ行く
かけたお椀に
密書いれて
大事な御用に
行きますの!



くなるご、急に飛ぶやうに走出して、夫から天津さして
又數十里の道程を急ぎに急いで、漸くの事天津へとたど
り着きました。

ところが此天津も今は恰かも戦場の様で、彼方にも此
方にも各國の兵營がありました、何れが英吉利のものだ
か少しも見分がつかませぬ。然し此少年密使は根氣よく
夫を尋ね廻て、七月の二十二日に無事英吉利の兵營を見
出して、携て來た密書を領事に手渡したのであります。

そこで領事から少年に、

「直ぐ援兵を送る！。安心せよ！」

と云ふ公使館宛の返書を受取り、直にもと来た道へと引返して北京に急ぎました。

夫から此少年密使は歸る道々屢々拳匪に見咎められて取調を受けましたが、其都度うまく言ひのけて通り過ぎ、七月二十八日に無事た北京に歸へり着きました。さて彼の四十丈もある城壁はきつと聳て丁度屏風を立てたやうです。少年には迎も攀登る事は出来ませぬ。

『早く夜の明けない中にー』。

斯様思て色々考た末に城壁の下の狭い流口から城内へくづつて入り、漸く公使館に着て返書を手渡しました。



此少年が無事に任務を果したので、人々は始めて生き返た思をなし、喜び勇で彼の勇敢な少年を大切に取扱ひました。併し少年は自分の手柄について少しも誇りたかぶる風なく、其後も一層敏捷に立働きました。

果して八月十四日になると、天津から援兵かやつて来て、拳匪は忽ち皆追拂はれましたので、公使館は全く安全となりました。

人々は大層此少年密使の功勞をほめて、種々な品物を贈つたさうであります。何と實に勇敢な少年ではありませんか。



三 夏子と冬雄

夏子と冬雄とは大層仲のよい兄弟でありましたが、或日のこと二人は椽側に出て繪本を面白さうに見て居りますと、

「今日は叔父さんのお家へ連れて行かう！。叔父さんのお家にはお前等の大好きな秋子さんや春雄がいるから……一緒に綺麗な花園で遊ぼうよ！」
と其處へお父さんが来てお話があり、奥へ着物を着替にまゐりました。



此事を聞いて小さな冬雄は、大層嬉しくて、たまりませぬから、お部屋中をはね廻で飛び歩かうちに、つい誤て卓子の上にあつた大切な瓶を轉げ落して破壊してしまひました。

「わや！」

と姉さんの夏子は之を見て大層驚きましたが、こはれたものはもう仕方がありませんから、疊に落散た硝子のかげを拾ひ集めて居つたのです。すると其處へお父さんが奥から出て来て、此様子を見付け、顔をしかめながら、

「夏子や！。御前が夫をこはしたのか？」



と云ひましたから、夏子は直ぐ疊へ手をついて頭を下
げ、

『はい！御父さん何卒御免下さい！』
と申してあやまりました。

『よし、仕方がない！。若し他家へ行って斯様なあやまち
が有つては困るから、今日は御叔父さんの家へ御前を連
て行くことはならない！。』

『はい！御留守を致しませぬ！。』

夏子は大層利憐な子でありますから、弟の罪を自分に
負はされてく少しも恨みませぬ。



此時までだまつて見て居た冬雄は、此の様子を見て大
層こらへられなくなりましたから、

『御父さん！其瓶をこはしたのは、姉さんではありませ
ん！。私です！。私が悪うございました！。どうぞ姉さん
を連れて行って下さい！。私が御留守しますから……。』
急にお父さんに泣付て斯う申しました。

是を聞たお父さんは夏子が弟をかばつたことや、冬雄
が大層潔よく白状した事等を此上もなく愉快に喜で、忽
ち此二人を左右の腕に抱へながら、

『オ、是でこそ誠の兄弟だ！。是から一緒に連れて行かう



よ！』

と申しまして、お父さんや夏子さんや冬雄さんは、面
白い話をしなかもお叔父さんのお家へでかけました。

四 少年鼓手の決心

昔或西洋の國に一人の少年があつて、夫は或兵營の鼓
手を務めて居たのでありましたが、或年の秋大演習があ
つて其終つた日に澤山の將校が集り、盛な酒宴を開きまし
たので、其少年も此席へ出てお給仕をして居ました。す
ると大將は大層少年鼓手を勞りながら、杯をやつて、



「さあ汝も一杯是を飲め！」

とすゝめますと。

「はい、私はお酒が嫌ひですから……。」

斯様少年は辭退しましたので、大將は重ねて、

「汝は毎日朝から晩までよく太鼓を打て、さぞ疲れるだ
らう！。左様な時に酒を飲むと疲がなほるから、嫌でも
無理に一杯飲め！」

と申されたが、此少年は固く辭して飲みませんから、
大將は非常な不機嫌で、怒り氣になり、

「おい汝は酒を飲まないから、兵士にする事は出来ぬ



ぞ！』

と申しました。すると此時傍に居た副官は少年に向ひ、

『汝は何故大將の命令に従はぬか？。若し大將の命令に背くものは、兵士とする事は出来ぬぞ！』

と言ひますと其少年は直立不動の姿勢を取り、

『私は此兵營に入りましたから、既に三年を経過しますがまだ一度も大將の命令に背た事は有りませぬ！。然しお酒を飲むのは必ずしも兵士の職務ではありませぬから、夫に従ふ事は出来ませぬ！。』



『元來酒は身體に大害がめりますから、斷然お斷を致します！。』

斯様に勇ましく答へましたが、副官は尙少年の心をためさうとして、わざと聲を勵まして、

『汝鼓手よ必ず一杯飲め！。命令に背くと直に斬り捨てるぞ！。』

と大層威嚇しました。併し少年鼓手は更に直立不動の姿勢を保て、

『はい、是には誠に深い仔細が御座います！。私の父は嘗て酒の爲に病氣になつて死にましたので、母は私が入



營する時『汝は生涯酒を口にするな』と固く誠めてくれました！。だから嚴命に従はないのは誠に恐れ入りますが、何卒此譯をおくみ取り下さい！。』
と言て此少年鼓手は、

「わつ！」

と忽ち泣き出しました。

大將はじめ居並ぶ將校連は一同此少年鼓手の固い決心に感心しましたが、是より其少年鼓手は次第に信用を得て立身し、遂には立派な將校となつたのでありました。



五 伶俐なトッチー嬢

昔アメリカに獨立戦争と云ふ大戦争がありました。其時アメリカのグリスタルドと申す知事が、今にも英國の兵士に捕虜にされやうとしましたから、漸く親類の家に遁込で、暫くの間は其處に隠れて居ました。すると間もなく敵兵が後から夫を知て追駈て来る事を聞きましたので、知事は急で其家を立出しました。

此知事のグリスタルドはかねて陸よりは見えない様に或川岸にある木の蔭に、一隻の小舟を繋でおきましたか



ら、早く其川の方へ逃げて行かうと、途中果樹園を通り過ぎました時に、十二三歳になる女の子に出會ひました。

此女の兒は名をヘツチーと申すので、今園の草の上へ麻の布を擴げて日に乾さうとする所なのでありました。が、其傍には水を入れた手桶がありまして、時々麻の布に打水をするのでありました。

突然垣を飛越えて入つて來た人のあるのを見て、ヘツチーは少し驚いた様でしたが、よくよく見るに自分の從兄ですから、



「あゝ、あなたでしたか？、私大層驚いたの！。何處へいらつしやるのですか？」

とヘツチーは聲高に申しました。

「もし、ヘツチーさん！。敵が今私を探しに來るのですから、敵の來ないうちに舟へ乗て逃げなければ、私の命は危いのです！。どうぞあなた川岸の方に居て敵に會て下さい！。敵は必ず私の行方を聞きたゞすに相違ありません。ぬから……。若し其時は私が驛馬車に乗らうと、此道路を向へ行たと言て下さい！。」

グリスタルドが斯様申しますと、





今年十二の
ヘッチーさんは
お閉口者の
娘さん
麻の袋に
かくまつて
ニコ／＼顔で
すましてる

伶俐なヘッチー嬢

童話

正男作



伶俐なヘッチー嬢

『いえ、どうして左様な事が云はれませうか？。夫は全く虚偽ですもの……。何故あなたは只今私に行先をお話しなされたのですか？。』

ヘッチーは問ひ返しました。

『あなたは、私を敵に捕へさせて殺させる考だね、嗚呼もう敵の馬の蹄の音が聞えて来た！。どうか私が此道を行ってしまったと言て下さい！。後生だから……。』

『いえ、嘘ばかりは云へませぬ！。而し敵が若し妾を殺しても、あなたが何處へ逃げたと云ふことは、決して申しませぬ！。だから早く彼方へお逃げなさい……。』



伶俐なヘツチー嬢

『いえ、どうして左様な事が云はれませうか？。夫は全く虚偽ですもの……。何故あなたは只今私に行先をお話しなされたのですか？。』

ヘツチーは問ひ返しました。

『あなたは、私を敵に捕へさせて殺させる考だね、嗚呼もう敵の馬の蹄の音が聞えて来た！。どうか私が此道を行ってしまったと言して下さい！。後生だから……。』

『いえ、嘘ばかりは云へませぬ！。而し敵が若し妾を殺しても、あなたが何處へ逃げたと云ふことは、決して申しませぬ！。だから早く彼方へお逃げなさい……。』

童謡

伶俐なヘツチー嬢

正男作

今年十二の
ヘツチーさんは
お掬口者の
娘さん
麻の袋に
かくまつて
ニコく顔で
すましてる



斯様云つてる中に、敵の馬の蹄の音は次第に近付きました。

『もう遅い！。さあ何處かへ隠れなければ……』

『早く此布の下へお隠れなさい！。妾が麻布へ水を打つてる様子をしてゐますから……』

『あゝ仕方がない！。ではさうしやう！。』

グリスヲルド知事は、あはて、澤山重ねた麻布の下に直ぐ隠れたのでありました。暫時すると一隊の騎兵が、砂煙を蹴立てて其處へ駆付けて來ましたが、一人の士官は少女を見て、



「汝は此處を驅抜けた人を見たか？」
高い聲で尋ねますと、
「はい！見ました！」
「夫は何處へ行つたか？」
「いゝえ、其事は言はない約束をしました！」
「直に白状せぬと、汝のためにならねぞ！」
「はい、其約束は守られねばなりませんから、決して申
ません！」
士官と少女の問答を聞いて、其隊の先導の一人が、
「私は此子をよく知てるますから、一つ聞て見ませう！」



と言って少女に向ひ、
「あなたは、ヘッチーさんだつたね！」
「はい、左様です！」
「今此所を逃去た人は、お前の従兄だらう！」
「はい！」
「私はお前の従兄とお話をして見たいものだ！彼の従
兄がお前の所へ来た時何を言つたのかね？」
「命を助けるために、早く逃去るのだと申しました！」
「全く左様だらう！どうか遠くへ行かねばよいが、従
兄は何所へ隠れやうとしてゐたか？」



「それは小舟に乗り、川岸へ行くのだと申しましたが、若し私を捜す人が来たなら、驛馬車に乗るため他の方へ行つたと言つてくれと云ひました!」

「ウン、お前はほんとによい子だ!。お前の答は皆な眞實であるのだ。お前が嘘を云ふ事は出来んと言つた時、彼の従兄は何と言つたのか?」

「はい、お前は私を敵の手に陥れて殺させる考かご申されました!」

「ウン、其時お前は若し殺される様な事があつても、必ず敵には言はんと言つたな?」



是を聞て少女ヘツチーは其愛らしい兩の眼に涙を流しながら、

「はい、左様です!」
と答へました。

「オ、夫はほんとに強い事を言つたな!。其時お前の従兄は大層お禮を言つて、早く川岸の方へ逃て行つらうな?」

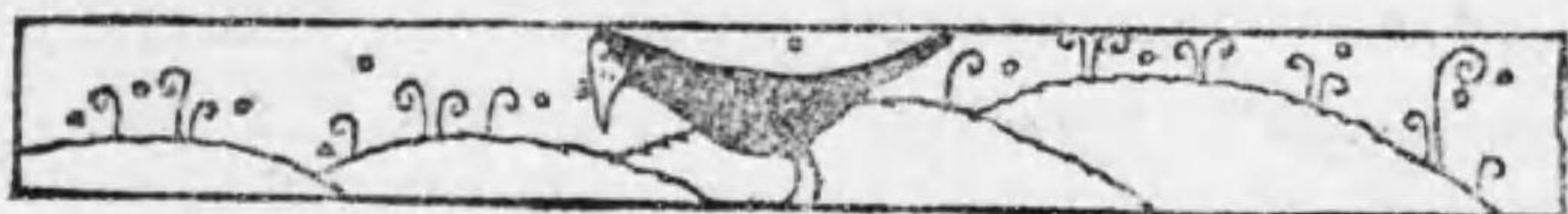
「いゝえ、何所へ行つたと云ふ事は、決して言はない様にかたく約束をしました!」

「わう、忘れてをつね!。彼は一番終に何と言つたか聞かしてくれ!。もう夫で何も聞かないから……」

『はい、従兄はもう夫れより他に仕方がないから、早くさうしやうと言ひました!』

言終てヘツチーはわつと泣出して、前垂で自分の顔をたほひました。彼の騎兵等はもはや是で十分に偵察したものと思ひ、忽ち馬を走らせて川岸の方へと急ぎました。

彼のグリスタルドは此果樹園の中に隠れてゐる間に船頭と合圖を定めましたが、夫は若し自分が危険になつた時は、隠れ家の上樓の窓に晝間なら白布を掛け、夜間なら燈火を掲ると云ふ合圖でありました。ですから船頭は



絶へず其合圖を見てをりまして、合圖が現れたら臨機にグリスタルドを救助しやうと待構へてをつたのです。

だから敵の騎兵が去りますと、ヘツチーの家の人は窓から白布を掛けて合圖をしましたから、是を見た二人の船頭は忽ち舟を海の方へ漕出し、敵が川岸へ着た時にはもう舟の影も見えませんでしたから、グリスタルドは既に舟で逃去つたものと思ひ込みました。

やがて晩方になりますと、ヘツチーは家に歸つて上樓の窓に燈火を掲げましたから、此合圖を見 沖にゐた舟は直に歸つて來ましたから、知事のグリスタルドは、無



事に夫へ乗つて遁れることが出来ました。

此事があつてから幾日も経過して、戦争も済み、講和も結ばれて、アメリカ州の山河に太平の気分が満ちました時、彼のグリスタルドは誠と機敏とを以てよく自分を救助つてくれた若い従妹へツチの思出に、自分の女の子の一人をもへツチーと命名たご云ふことであります。

六 孝行準一

東京本郷の湯島に中山三郎兵衛といふ人があつて、毎日紙屑を賣買して生活をしてをりましたが、此人には今



年九歳になる準一と云ふ子がありました。或日のこと往來で遊んでをりますと、何物にか拐誘て行方不明となりましたので、三郎兵衛夫婦は大層驚き、直に此事を警察に訴へて諸方を搜索してもらひましたが、少しも手掛りがありませなんだ。

ところが其準一を拐誘つた男は、何か悪漢でしたから準一を連れて直に青森から北海道へ高飛びしようと、瀛車にも乗らずに長い旅を続けましたが、此準一は道々紙屑を拾つて行きましたので、悪漢の男は夫を大層不思議に思つて、



『さう紙屑を拾つてどうするか?』
と尋ねますと、準一は

『僕のお父さんは紙屑屋だから、斯うして紙屑を拾ひ集めて、夫をお父さんは贈つてやらうと思ふのだ!』
と言ひました。

夫から其子供は大層兩親を慕つて、寐る時にも起きる時にも、食時の時にも、常に東京の方を向いて兩親を拜みました。或日其子供は思はず、

『あゝ、今頃はお父さんやお母さんは、何をしていらつしやるのか知ら、晝夜晝僕のことをばかり心配していらつ



しやるだらう!』

と聲を立てわつと泣倒れたのでありました。

準一を拐誘つた男は、毎日其子の動作に注意してをりました。段々子供の様子を見て大層氣の毒に思ふ心。きざし、遂には自分の行ひを深く愧ぢるやうになりました。

『あゝ思へば自分が此子に對して、した仕業をよく考へて見ると、人道に背いた事が二つ程もある、其一つは自分の親の教へを守らない事で、他の一つは此子は斯くまで日々兩親を大切に思ふのに、之をさらつた事である!』



すべて自分のした事は、彼の虎や狼のする事よりも一層残酷のである！、だから今より直に此子を其親元へ送り還さう！、よしとへ途中で餓死する様なことがあつても、今日からは決して詐欺や人さらひはしまし！。』

斯様に男は思ふやうになりましたから、直に準一を連れて東京へ歸りましたが、湯島に着いた時は既に日の暮方で、丁度其子の両親は家に居りましたから、男は家の外から大聲で、

『今、私は拐誘つて行つたお宅のお子さん連れて來ました！。お受取り下さい！。』

と言捨て、忽ち何所かへ遁げ走つて其姿をくられましたのであります。

此時から六七年の間は、此悪漢の在所が少しも知れませんでした、或日の事準一の家の前に一人の坊さんが來ました、其時は父はもう此世を去つて準一が主人となり、紙屑業を繼いで居たのでありましたが、其坊さんは家の中へ入つて來て、

『私は今から六七年前に、あなたをさらつて青森の方へ行つた者であります、其後總ての悪事を後悔して懺悔をなし、罪滅しに坊主となりました。私が斯様に佛の道

に入つたのも實はあなたの孝心からです!』
と申して、共に昔の事を語り、丁寧ていねいに準一じゆんいちの父を供養くやうをして何所かへ漂然ひらうぜんと立去つたと云ふ事であります。

七 嘘つき小僧の八助

或村に、八助と云ふ大層嘘つきをする小供がいました。だが、此八助は常に村端れの牧場で、狼等に捕へられぬやうにと、羊の番をして居る子で有りました。或る春の永い日に、餘り退屈なものですから、一ついつもの様に嘘をついて、村の人々をみんな呼出して見や



うと、大層もない悪い考へを出したので、牧場の中の高い丘へ登つて、

「狼た々々!」

と大聲に怒鳴りましたから、村の人々は其聲に大層驚いて、皆な棒やら槍やら鋏等を持って大急ぎで駆付けて見ますと、少しも狼の來た様子はなく、多數の羊は平氣で草を食つたり遊んで居りました。是を見た村人は不思議に思つて、

「八助さん!。狼は何所に……」

と尋ねますと、八助は誠に眞面目な顔付きをして、

嘘つき小僧の八助





嘘つき小僧の八助

『先刻向ふから来たが、僕が大声を出したのに驚いて、遂とう逃去つてしまつたのよ！』

斯様うまく嘘をつきましたので、村の人達は夫を眞實に思つて、

『夫はまあ宜かつた！』

と言つて歸つて行きました。其有様を見た八助は舌をペロリと出し手を打つて喜び、

『まあ旨く欺してやつた！。明日も亦欺してやらう！』
と獨言を言ひ、其日は何事もなく羊の番を勤めたので有りました。



童話

嘘つき小僧八助

正男作

ストーンキョの

八助が

狼々と

嘘ついて

近所の人

飛んで来ると

大馬鹿法主と

わいらつた



嘘つき小僧の八助

『先刻向ふから来たが、僕が大聲を出したのに驚いて、遂とう逃去つてしまつたのよ！』

斯様うまく嘘をつきましたので、村の人達は夫を眞實に思つて、

『夫はまあ宜かつた！』

と言つて歸つて行きました。其有様を見た八助は舌をペロリと出し手を打つて喜び、

『まあ旨く欺してやつた！。明日も亦欺してやらう！』
と獨言を言ひ、其日は何事もなく羊の番を勤めたので有りました。

童 話

嘘つき小僧八助

正男作

ストンキヨの

八助が

狼々と

嘘ついて

近所の人

飛んで来ると

大馬鹿法主と

わーらつた



夫から其翌日になつて、午後の三時頃になりますと、

八助は又日永の退屈さに、

「又だましてやらう!。」

と彼の小高い丘に登つて、大聲を上げて、

「やあ、狼だく!。」

と呼立てましたので、村の人達は、又來たのかと非常

に驚いて駈付けましたが、今日も狼の來た様子は少しも

見へません。だから誠に不思議だと思つて、

「狼は!。」

と八助に尋ねますと、八助は只ニヤリくと笑つて居

るばかりですから、人々は初めて八助に欺された事を悟り、

「此嘘つき小僧奴！」

と云つて大層怒りながら歸りましたので、其後を見送つた八助は、亦手を打つて大笑ひして喜びました。

夫から五六日も經過て、八助は平素のやうに羊の番をして居りましたが、餘り退屈だから草の上に寝轉びますと、遂にうとくと寝込んでしまひました。すると暫時たつて、牧場の方で羊が大層騒ぎ出しましたから、目を覺して起上りながらよく見ますと、さあ大變、大きな狼



が出て来て、牧場の柵の中に飛込んで、羊を片端から何頭も何頭も喰殺して居る所でありました。斯くと見た八助は吃驚仰天して、今度は一生懸命になり、

「やあ、狼だ〜！」

と有らん限りの大聲を張上げて呼立てましたが、此聲を聞いた村の人々は、

「亦彼の八助の嘘つき奴が！」

と言つて誰一人助けに来る者はありませんでした。然し八助が泣聲を立て、あまり呼廻りますから、

「今度は眞實かしら！」





と村の人々が餘程すぎて駈付けた時にはもう遅い。彼の大きな狼は、片端から羊の群を喰殺してしまつた後でありました。

八妹の心願

丹波の國と丹後の國との國境に、毘沙門山と云ふ名高い山があつて、其所には御利役のある毘沙門様が祭られて有りました。昔其麓の村に大層貧しい一軒の家が有りましたが、母と娘二人の三人暮しで、姉は十七歳、妹は十歳で、父は今から貳年前に病氣で死んだので有りました。



た。

此二人の娘は毎日働いて母を養ひましたが、並大抵の働きでは逆も三人の暮しは出来ませんので有りました。毎日朝早くから姉は山へ行つて薪を取り、亦是近所の家には雇はれて賃仕事をいたしました。妹は果物を商つて町を歩き、是等の収入で母を養つてをりました。然し夫でも困る時が有りますから、妹は姉と共に人の軒に立つて食物を乞ひ歩いたことも有つたのです。

「お前と私と毎日かうして働いたとて、お母さんを養ふ事は誠に覺束ない！ 聞けば京都には人商人が有ると云

ふ事だから、私は夫を尋ねて身を賣り、其お金でお母さんを養ひたいと思ふ！。お前は年はまだ幼いけれども、お母さんを大切にするがよい！。』

斯様或日姉は涙ながらに妹へ言ひ聞かせましたから、妹は姉に別れるのを大層悲しく思つて、共々に泣いて答へもいたしません。

『此事はどうかお母さんにも申し上げて呉れるな！。』と姉は妹をなだめすかして家にかへりました。

其日から日暮になると、いつも妹の影も見えないから姉は不思議に思つて妹の行方を母に尋ねますと、居たのです。

或晩の事雨が太層ひどく降りましたから、姉は妹に向つて、

『今夜は大雨で山道は眞闇だ！。険しい坂を登つて若し怪我などしては、却てお母さんに心配を掛ける事になるから、明日になつて晴れた後參るがよい！。今夜はお止めだよ！。』

かう言つて止めましたが、妹は



「今日は七日の満願日ですから、お母さんや姉さんの事を毘沙門様へお願いしておきながら、どうして嘘がつかれませう!。どうか今夜だけは是非お許し下さい!。だから此事をお母さんに知らせて下さい!。」

と言つて夜中頃只一人大雨をかまはずに、一里餘りもある峠のお堂へ登つて行きましたが、やつとの事で御堂の前へ行つて見ると、御堂の中は赫々と火影が輝いて居ます。はて不思議なことだとお堂の内を覗いて見ますと、二人の大きな男が雨に濡れた着物を焚火に乾して、何か話をして居りました。是を見た妹は、山賊だと思つて大



層驚きました。母を思ひ姉を思ふ心の一念に、恐ろしさも打ち忘れて、静かに御堂の中へはいりました。

其物音に二人の男は驚いて外の方を見ますと、十歳ばかりの女の子が、唯一人箕笠を着て來ましたので、不審に思ひ、

「斯様な真闇い雨夜に、たつた一人で來たのつ、何か連れの衆にでもはづれたのかえ?。」

と尋ねますと、

「いゝえ、連などはありません!。」

と言ひましたので、又

『夫なら何所へ行かうと思つて、此所へ来たのかえ?』
と聞きますすと、

『私は、此御堂の本尊様にお願事があつて、今夜は丁度七日の満願日ですから、雨もかまはずに参つたのです!』
と言ひながら、本尊様の前に進んで暫時熱心に禮拜して居ります。二人はじつと夫を眺めて、

『麓の村からは遠いのに、ごんな願事があつてかえ?』
と聞きましたすが、此少女は口を閉ぢて何物も申しません。強て尋ねますと、

『私は、一人のね母さんと姉と二人で毎日暮して居りま



すが、歳がまだゆきませぬので、阿分心が届きませぬ。日々の生計が苦しいものですから、姉は身を賣つて母を養はうと言ひます!。私は夫が大層悲しくて、是は神佛より外にお願ひするものはないと思ひ、此御堂の本尊様に七日参りの願を掛け、若し其事が叶はなければ、私の命をお召し下さいと、毎晩お祈りに……。』

とさめくと泣きながら物語りました。二人の男は互に顔見合せて是も涙を拂ひながら、

『あゝ、世にもまれなる孝心深い娘子であるわい!。よくこそ母を大切に思ひ、又姉をも大事にすることだ!。』

と言つて、何事かさゝやいて居りましたが、やがて風呂敷にお金と着物ごを添へて、是を少女に與へ、『今から一層よくお母さんに孝行をなし、姉さんを大切にすることがよい！。私達は旅の商人だが、お前の孝心に感心して、不便に思ふから之を褒美に上げるのだよ！。』と言つて簑笠をも着せて歸したさうであります。

九 人喰ひ亭主

或る町に仲のよい二人の少年がりましたが、或る日曜日（ちゅうび）を幸ひに遠足にと出かけました。所がどうした事か



ついで道に迷つて大きな森の中に入り込み、或るきたない宿屋（やどや）に一夜を明かすことになりました。

夜中頃になつて、ふと目をさますと、次の部屋で何か話聲（はなしこゑ）が致しますから、二人の少年はそつと壁の傍へ寄つて、耳を澄まして聞きますと、其家の主人は、はつきりした聲で妻に向ひ、

「翌朝は早くお釜の下に火を焚くがよい！。町の奴さんをやつつけるんだから……。」

と言つて居りました。二人は是を聞いて大層驚いて震へ出し、





『では此家の主人は確かに人喰ひに違ひない!』
と忽ち顔色を變へて、夜の明けぬ中に早く逃出すことに相談いたしました。

夫から二人は仕度をして窓の外へ飛下りましたが、何しろ眞闇な處へ急いで飛下りたのですから、二人共足を痛めて少しも立つことが出来ませぬ。又庭の木戸が確く締まつて居りますから、外へ逃出すことが出来ませぬので、二人の少年は手探りに這入つて行きますと、其處に豚小屋がありましたから、是幸ひと其中に入つて息を殺して隠れて居つたのです。



其中に夜が明けますと、怪しい顔付の主人は鋭い刃物を持つて豚小屋の前に来て、

『さあ、今から俺が貴様たちに引導をわたしてやる!』

と言ひましたから、二人の少年はもう堪りかねて、わつと大声を立てて泣き出し、両手を大地について頭を下げ、

『どうぞ私共の命だけは!』

と嘆願をしました。

主人は豚小屋から二人の少年の出したのに驚いたが、是は不思議なことだと思つて、其譯を尋ねますと、二人は



人食ひ亭主

大層泣きながら、昨夜聞いた事をすつかり話しましたから、主人も驚いて、

『まあ、あなた方はほんとに馬鹿なことをしたものだ！』

私は少しもお前さんたちのことを言つたのではない！』

町から買つた豚のことを、戯談に『町の奴』さんと言つた

のだが、お前さんたちは、早呑込みに聞き違ひをしたも

のだ！。全體立ち聞きなんかするから悪いのだ！』

と言ひ聞かせて大笑ひしたと云ふことです。



童 話

少女ゲルトリユード

正男作

小さい時に

さらはれて

知らぬ他國で

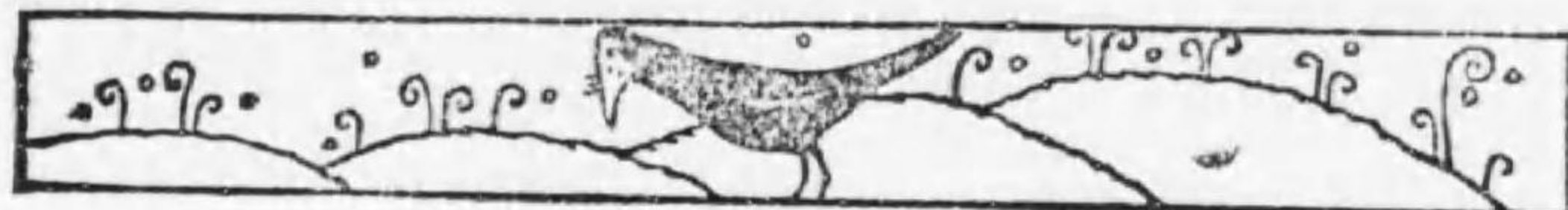
歌唄ひ

とうさん戀し

かあさんも

あひたい見たいと

泣いてゐた



人食ひ亭主

大層泣きながら、昨夜聞いた事をすつかり話しましたから、主人も驚いて、

『まあ、あなた方はほんとに馬鹿なことをしたものだ！。私は少しもお前さんたちのことを言つたのではない！。町から買つた豚のことを、戯談に『町の奴』さんと言つたのだが、お前さんたちは、早呑込みに聞き違ひをしたものだ！。全體立ち聞きなんかするから悪いのだ！。』
と言ひ聞かせて大笑ひしたと云ふことです。

(70)



童 謠

少女ゲルトリユーデ

正男作

小さい時に
さらはれて
知らぬ他國で
歌唄ひ
とうさん戀し
かあさんも
あひたい見たいと
泣いてゐた



一〇 少女ゲルトリユーデ

昔のことでありましたが、獨逸の或る寂しい片田舎に一人の農夫がありました。夫婦の間に五人の子供があつて、僅かばかりの田地を持つて居ましたから、大層質素な暮らしをして居りましたが、長女のゲルトリユーデと云ふのは、年はまだ十歳ですが、其性質が伶俐な方で、平素大層まめやかに立働きましたので、少しは家計の助けとなつたのでありました。

此村の三方は誠に廣々とした野原で、牧場となすに適

少女ゲルトリユーデ

當して居ますが、一方は山で麓から頂上まで一面に葡萄が生ひ茂つて居ましたから、耕作の餘暇には牛や羊を飼ひ、亦是は葡萄を採取して酒を造りました。氣候が誠によくて、豊年の時には毎年生活に困る様なことはないばかりか、他人に施してやる位の貯へも出来たのであります。殊に春から夏にかけて、多くの果物の熟する頃には、家内残らず連立つて野に出て、梨の黄色なのや赤い林檎や其外色々な果物を取つて來ますが、秋の涼しい頃になりますと、親子一しよに小さな籠を背負ひなだら、山に登つて、美しい紫色に熟した葡萄の房を採つて來ますの



で、夫等の樂みは實に何とも申されぬ程で、大層温かい家庭を作つて居たのであります。

夫でケルトリユーデは、毎日近所の小學校へ通ひましたが、其一番大好きな學科は唱歌で、毎朝お友達と共に謳ふ讚美歌は、此ケルトリユーデに取つては、全く樂しい仙人の居る境に入つた様な思ひがしたのであります。ケルトリユーデが父について町へ行つた時、道々鶯の様なよい聲で、學校で習つた唱歌を歌ひますと、其近處の人々は皆な耳をかたむけて聞いたさうであります。實際此少女は天性誠に美しい聲を以て生れたのです。





或日のこの、此ゲルトリユーデは、いつものやうに父について町へ行つて、やがて家に歸つて來ましたが、まだ家に入らぬ時、父は持ち歸つた籠を、庭の外の物置に入れよと言ひ付けて内へはいりましたから、少女のゲルトリユーデは、夫を入れやうと物置の前に行きますと、常に見慣れぬ男が垣根の外に立つてるのを見付ました。やがて其男は、

『ゲルトリユーデさん！一寸此處までいらつしやい！』
と手招きしましたので、別に氣遣ふこともなく、

『何御用ですか？』



と其男の近くへ行きました。すると其男は、

『今彼處の生垣の間に、あなたのお家の子羊がはさまつて苦しがつて居りますので、夫を取つて上げますから、私ご一しよに一寸いらつしやい！』

斯う大層親切に申しますから、少女のゲルトリユーデは其男の後について行きました。もう生垣の盡きかけた所へまゐりましたが、仔羊の影は少しも見へませぬ。

『此邊に居る筈ですが、多分迷つて此小路を下りて行つたのでせう！もう少し私と一緒にいらつしやい、そこらに居るでせうから……』

男は斯う云つて尙遠くへ連れて行かうとしますから、ゲルトリユーデは少しく物凄くなつたので、

「私、お母さんが案じてゐますから、もう歸りますわ!。」
と言ひながら逃出さうとしました。するに此怪しい男は、早くも夫を見て、ゲルトリユーデを引捕へて、之れを抱き上げ、手早く何かを口の中に押し込んで、聲の出ない様になし、肩に擔いで道を走つて行きました。が、かねて用意のして有つたものと見ゆ、其所に一輛の小車があつて、男は其上に少女を投上げて、傍らに繋いである馬の手綱を手早く解いて、車を馬に曳かせ、自分から



夫を馱して十分に鞭を當てましたから、馬は矢の様に何所ともなく走つて行きました。

車の上へ投上げられたゲルトリユーデは、救助を求めやうと一生懸命にもがきましたが、すこしも口を開くことが出来ませぬ。大層淋しい道をおよそ二三時間も行きますと、馬は疲労れて走ることが出来なくなりましたから、怪しい男は車を其所に止めて、少女の口から猿ぐつわを取放し、

「静かにすればお前をどうもしないが、もし聲を出して助けを求めたり、今日の事を他人に話すと、すぐ殺して



しまふぞ!。」

斯う男は云ひながら、するどい短刀を抜いてゲルトリユーデをおどしつけました。

やがて男は車から降りて、路端の小さな家に入り、種な食物を出してゲルトリユーデにやりました。夫が食べられませう。少女はシクシク泣いて居るばかりでしたが、間もなく寝ることを許して貰ひました。

さても此怪しい男は何者であるかと申しますと、其名をシユールと云つて、矢張り獨逸人でありましたが、若いときから早く故國を出て、諸方の國々をさまよひ、世



界中彼の足を入れない國はない程の者です。だが今は只僅かの商品を得て、毎日之を近くの町へ賣つては、少々利益を見て生活して居たのですが、時々町へ行く道でゲルトリユーデの美しい歌の聲を聞き、

『此女の子こそ實に天の賜物だ!。之を英國へ連れて行って、歌ひ聲を賣つたなら、必ず大金儲けが出来るのだらう!。』

斯様ひとり心にうなづいて、遂にかれは奪ひ去つたのであります。

翌日になつて、此男は亦ゲルトリユーデを前の車に乗



せて行きましたが、夫れから四五日間も旅行を続けました。其間男はケルトリユーデの大層打ちほれた様子を見て、頻りに種々と慰めました。少女の気分は常に晴れませなんだ。

夫から数日の間旅行致しますと、やがて大層賑やかな大きな港に來ましたから、ミユールは車と馬とを賣拂ひ、ケルトリユーデと共に汽船に乗込み、間もなく英國のロンドンに着きました。ミユールは諸所を連れ歩いて、種々の珍しい物を見せました。

『お前も知つて居る通り、今は國から持つて來た金も



すつかり使つてしまつた！。是からは何か錢取りをして暮しを立てねばならない！。お前は、大層おとなしくして居るから、早く國の両親の所へ歸さうと思ふが、第一入用なものはお金であるから、何か錢取りの工夫をしなければならぬ！。思ふにお前は生れつき大層よい聲を持つて居るから歌を歌ふがよい！。私は其歌に合わせて躍るから……然し歌を知らなければ教へて上げやう！。今日から前前は私をお父さんと云ふのだよ！。』

或る日、ミユールはケルトリユーデに向つて斯様申したから、ケルトリユーデも泣く泣く其の言葉に従ひま



した。

是れから毎日英國の各地を經廻つて、歌を歌ひましたが、到る處でゲルトリユーデは其天然の美聲を褒め嘯されて、一度口を開いて歌ひ始めますと、道行く人も皆立止まつて夫に聞き惚れる様でありました。

お話は變つてゲルトリユーデの家では、不意に可愛い娘が見えなくなつたので、其両親は狂氣の様になつて悲んで居ましたが、村の人々もゲルトリユーデが行方不明になつたと聞いて、諸方を搜索して呉れましたが、更に其行方は分りませぬ。だから是は屹度河に溺れて死んだ



のだらうと、両親も心にあきらめて、今や我が子が千里を隔てた英國にさまよつて居やうとは、夢にも思ひませなんだ。

ゲルトリユーデが行方不明になつてからは、此家に種の不幸が打續きまして、或る時は一種の流行病のために飼つてある羊の半數ばかりが倒れて仕舞ひ、夫れから二年程たつて、ひどい不作に出遇ひ、日々の暮しにも差支へましたから、少しばかり持つてる田地を賣拂ひました。然し一難されば一災來り、ゲルトリユーデが行方知れずになつてから、丁度十年目に當つた時、種々な不運

のために家財田地等を残らず賣盡くして仕舞ひ、全然無一物になつたのでありました。

頃は吹く風の肌寒い秋の末つ方、日暮になつても爐にたく炭さへありませんから、父は窓に寄り掛つて、両の腕を組み合せ、小頸を傾けて心配な様子、母は幼い赤子を抱いて力なげな風情。

『あゝ、重ねぐの不幸も、皆な神様のなさつた業とあきらめて、今日までは辛抱して来たが、もう此上は全く希望も絶えた！』

と、やがて父は悲しげに言ひますと、母は是れに答へ



て、

『此困難も皆な神様の御命令と思へば、少しも心配は御座いませぬ！』

と言ひながら我が兒の顔を眺めて、ほろりと一と滴の涙を落しました。

『よし／＼何も心配するには及ばぬぞ！。思へば彼の娘のゲルトリユーデが行方知れずになつてから、一つとして誠に宜い事はない！。長く此の家に居たら、又どんな災難が来るかも知れない！。明日は早々支度を調べて、此家を棄て旅立つとしよう！。行方は何處、其上はどう



ならうと神ならぬ身の少しも知ることはない!』
と父は冷かに笑つて言ひも終らぬうちに、蹄の音高く車の響勇まじく一輛の馬車が来て、はたと家の前に止まりました。

『はつ!』

と驚きながら父母は互に目と目を見合せて居ますと、門口に身の丈の高い、人品賤しからぬ一人の婦人が立ちました。村の人々も、どんな人が来たのかと馬車のまはりに集つて來ましたが、

其貴女は両眼に涙を浮べ、物をも言はないで居ました



が、暫時すると、

『私は、ゲルトリユーデで御座います!』
となつかしきうに父の膝下に寄付きました。

『お、お前はゲルトリユーデか?』

と父は確く抱きしめる、母は涙に咽び、子供等は泣き出す。暫時は非常の混雑でありましたが、やがてゲルトリユーデは気分を取りなほし、一同の落着いたのを見て、静かに過去十年の間に於ける其身の成行を物語り、英國に連れられて行つてから、二年の間はミユールと共に諸方をさまよつて、歌ひを業として澤山のお金を儲けた



こと。其後ミユーレルは仲間の者と或夜大喧嘩をして、ひどく頭を撲たれて夫れが病氣となつて、間もなく死んだこと。其後は辻歌ひをして居ると、或る紳士に救助られて、十分な學資の下に音楽を學び、二年たつと立派な音楽師になつたこと。両親がアメリカに行つたと聞いて、紳士の許しを得て、一先づ故郷に歸り様子を搜らふとして、計らずも唯今十年振りで斯様に両親兄弟と對面するに至つた事等を述べて、一同且つ喜び且つ泣いたのであります。

夫からゲルトリユーデは、間もなくよい田地を澤山買



受け、立派な家を構へて両親を安樂に住はせましたが、又自分で學資を出して、弟と妹とを學校に入れたのであります。そして冬の間は出て藝を賣り、夏の間は歸つて來て愉快に月日を送つて居りましたが、遂にゲルトリユーデは昔小學校の友達で、今此村の管長である人のお家へお嫁にまゐつたこと云ふことであります。

一一 無智の松吉

或家に松吉さんと云ふ子がありましたが、此子はまだ谷や森の中に起る、こだまと云ふものを少しも知りませ





こだまを知らない
松吉が
馬鹿と怒鳴れば
また馬鹿と
こだまするのを
知らないで
地団駄ふんでる
阿呆者

童 話
無智松吉

正男作



無智の松吉

んでした。

或日の事、裏の山の谷間に行きまして、

「おう！」

と云ふ聲を出すと、向ふの森の方でも、

「わう！」

と云ふ聲がいたしましたので、松吉は大層不思議に思

「誰だあ！」

と咎めますと、向ふでも、

「誰だあ！」



こだまを知らない
松吉が
馬鹿と怒鳴れば
また馬鹿と
こだまするのを
知らないで
地団駄ふんでる
阿呆者

童 話
無智 松吉

正男 作



無智の松吉

んでした。

或日の事、裏の山の谷間に行きまして、

『おう!。』

と云ふ聲を出すと、向ふの森の方でも、

『わう!。』

と云ふ聲がいたしましたので、松吉は大層不思議に思

つて、

『誰だあ!。』

と咎めますと、向ふでも、

『誰だあ!。』



と咎めますから、松吉は大層腹を立てて、

『馬鹿やあ!』

と申しましたら、亦

『馬鹿やあ!』

と言ひ返しますので、愈々松吉は怒つて、あらゆる悪口を云つて見ますと、矢張り其通り向ふでも大變な悪口

を云つて來ます。

だから松吉は、

『此の奴め!。きつと探し出して、ひどい目にしてやらうから……。』



と森の中を彼方此方と尋ね廻りましたが、何者も見付かりませんので、大層疲れきつて家に歸り、餘りのくやしさに泣きながら、其事をたかあさんに訴へますと、

『夫は誰がいひ返したのでもありません！。あれはこだまといふものです！。お前さんの聲が森や谷間に響いて返つて来るからです！。其時お前さんに悪口の聞えたのは、お前さんが悪口をいつたからです！。若し其時お前さんが親切な事をいつたら、必ず向ふでも親切な事を返して来た筈です！。』

斯う教へてくれましたから、松吉さんは自分の智識の

たらない事を恥ぢて、成程と思ひました。

一一一 ジョン君の義侠

英國の名高いセントレオナード寺院に、雲突くばかりの高い塔が立つて居ましたが、無闇に人の登らぬやうにと、其階梯は皆引揚げられてありました。然し其入口の扉は何時も開放してあつたのです。

或日二人の子供が来て、其塔の近くで遊んでゐましたが、其中に段々と塔の中に入りしました。此塔の中は其構造が大層込入つて居て、何千本と云ふ柱の間には、無數

ジョン君の義侠





の貫木が架け渡されて居りましたが、大きい方の子供は、『梯子なんかなくても大丈夫だよ！。さあ登らう！』と云つて先に立ち、すばやく貫木に取着き、梁を傳はつて早や一丈ばかりも登りましたから、小さいのも之を見て、負けぬ氣となり、後から『待ち給へ！。僕も登るから……。』

ご同じ様に登りはじめましたが、二人は互に競争してよち登る有様は、恰度猿が樹から樹へと傳はつて行く様で、忽ちの間に殆ど五六丈の高い處にまで達しました。すると此處に架けてあつた一本の桁木は、何時の間に



か腐つて居たので、二人が同時に足を架けると、其重みで忽ち真中からめりくと音がして、折れて落ちかゝりました。此時大きい子は早く上の横木に手をかけましたが、小さい方は其暇がなくて、折れた桁と共にずると落ちはじめましたから、

『あつ！。』

といひざま、直に大きい子のぶら下げた足に取付き、漸くの事で落ちるのを免れました。斯様に小さい子が大きい子の足に捉まつてぶら下つて居るのですから、其危険さ云つたら大層なもので、

「助けて〜！」

と二人は聲を合せて泣き叫びましたが、人家を遠く離れた寺院の事ですから、誰一人助けに来る者はございませぬ。さうかうする中に大きな子の両手も二人分の目方に曳かされて、已にしびれを覚え、今にもちぎれさうになりました。

すると大きな子は堪へ兼ねて、下の小さいのに涙をふりかけながら、

「ジョン君！。僕はもう叶はぬ！。君も覺悟し給へ！。」
と言ひますと、ジョン君は仰向いて、



「ジエー君、今僕が居ないとしたら、君だけは必らず助かるだらうね！」

「僕だけなら、まあ助からうよ！」

「夫れなら、今僕だけ手を放して死ぬ事にしやう！」

「いや、死ぬなら二人共一緒に……。」

「いや、僕はとても助からぬ身だから、せめて君だけでも……。オイ、ジエー君！。之が今生のお別れだよ！」

といふが早い、ジョンは忽ち手を放したから堪らない。

「ズドーン！」



と五六丈も高い處から、下の敷石の上に落ちて、頭部を打碎き、あはれ無惨な即死を遂げましたが、是を聞いた人々は、皆ジョンの義侠に感心せない者は一人もありませんでした。

一三 秋子のなさけ

或る大層寒さの厳しい冬の事でありましたが、秋子と云ふ少女は毎日食へ残りの御飯を取つて置いて、寒さも厭はずに朝晩庭へ出ては、雀や其他の小鳥に夫れを投げ與へて、其嬉しさうに喰るのを見て、何よりの樂みと致



しました。

お父さんやお母さんは此様子を見て、大層可愛らしく思ひましたから、

「秋子や、お前はなぜ毎日左様な事をするのか？」と或る日父が尋ねましたので、

「はい、雪や氷で小鳥の食物がなくて、大層可愛さうですから、私が毎日養つてやるのです。」

と秋子は申しました。

「夫は實によい考へだが、どの鳥も皆な残らず助けることは出来まい！」



と父が又斯様云ひますと、

「他の子供も大勢で私の様にするでせうから、どの小鳥も亦皆な食べることが出来ませう！」

と秋子は答へましたので、お父さんもお母さんも、大層此答へを喜んで、秋子のやさしい心掛けを褒め、
「すべて其通りに人でも鳥でも、獣でも皆親切をつくす
ものですよ！」

と言つてよく聞かせたと申すことです。

一四 摘喰の菊子

或る所に菊子と云ふ女の子がありました。此の子は
悪い癖に何でも食物を見ると、チヨイ〜摘み食ひをす
るのですから、御臺所の茶壺の中にお砂糖がありますと、
直ぐにチヨイと夫れを兩の指に摘んべ嘗め、お皿の中
にお魚がありますと、矢張りチヨイと是れも摘み食ひを
すると云ふ、實にいやなお行儀の悪い子でありました。

或る日お母さんは、

「菊子や、勝手へ行つて卵を持つて来ておくれ！」
と言ひ付けましたので、

『はい！』



摘み喰の菊子

と菊子は言つて、直に勝手へ行きましたが、いつもの悪い癖が出て、何か摘む物はないかしらご、あちこちを眺めました。

すると丁度棚の上に、いつもお砂糖を入れて置くお壺がありましたから、

『あゝ、よいものが！』

と、いきなり手を延ばして夫れを摘まうとしました。

どころが相憎と甘いお砂糖は其中になくつて、夫が二三日前になくなつたから、代りにお母さんが生きた蟹を買つて入れておきましたので忍りませぬ、蟹は大きな鉄



で、菊子の指を確かと挟んで、振つてもたゞいても、どうしても離しません。

『わつ！』

と菊子は聲を立てて泣き出しました。

此泣聲を聞いて何事が起つたかと、父母は大層驚いて勝手へ駆付けましたが、見れば此有様なので、父は直に蟹を取離してやりました。

菊子の指先には血がにじんで、痛くて堪りませぬから、ちつところへて居りますと、お父さんやお母さんか

摘み喰の菊子

「こんなつらい目に逢ふのも、日頃驚み喰ひをするからだ!。」

と叱られて、お行儀の悪いのを戒められました。菊子さんは、是からすつかり摘み喰ひは止めてしまつたと云ふことです。

一五 憐れマツチ賣

處は東京日本橋の電事停留場より少し向ふの、或る大きな銀行の入口でありましたが、背丈の高い立派な洋服を着た紳士と、赤い手提鞆を持つた商人らしい男と、何



か笑ひながら盛んに話をして居りますと、其處へ年の頃十一二歳位な、汚ない垢じみた着物を着て、顔や首のあたりが垢だらけの小供が來まして、

「旦那!。どうぞマツチを買つて下さい、どうぞ!。」
紳士は頻りと話をして居りましたから、少しも振返りもしないで、

「いらないよ!。」
と鼻の先きであしらひました。

「旦那どうか買つて下さい、左様おつしやらずに……ねどうかお願い致します!。」



「いや、マツチは澤山あるよ!。」

「たつた一包一錢ですから、どうか旦那後生ですが!。」

「誠にうるさいな!。いらなると云つたらいらなない。」

「では付木を添へますから、どうか買つて下さいな!。」

「いや、價がたかいのぢやない、澤山あるからいらなないよ!。」

「誠に私、困つてゐますから、どうかお助け下さると思つて買つて下さいね!。」

斯様あまりうるさくせちがふものですから、紳士は、

「では、いらないが一包み買つてやらうか?。」



「どうも有難う御座います。」

紳士は洋服のポケットに手を入れてさぐりながら、

「いや、是はいけないよ!。相憎と一錢のがない!。是

れ見な、十錢や二十錢や五十錢のばかりしかない!。氣

の毒だが又にしやう!。」

「では、私が一寸取換へて來ませうよ!。」

「よし。今急ぐから取換へたら、釣銭は向ふに見える松

屋と云ふ旅館にもつてきな!。五十錢だよ!。」

是を聞いて其子は非常に喜び、忽ち何處かへ駈けて行きました。

此紳士は話を濟よして松屋に歸つて、二時間程も過ちますけれども、あの賣子は釣銭を持つてまいりませんから、

「ウン、あの子供に一杯食はせられたのか？ 東京と云ふ所は、子供までなか／＼油斷が出来ないな！」

斯様獨言を云ひましたが、

「然し、あの子はなかなか正直らしく見えたが、まさか自分を偽しはすまい！」

と思ひ返して、用事のため外出をして、晩に歸つて來ますと、早速女中は用意のお膳を運びまして、



「旦那様、おそくなりましてすみません！ どうか召上つて下さい！」

と丁寧に出しました。

「女中さん、私の留守の内に十二三歳位の子供は尋ねて來ませんかね！」

「いゝえ、左様な子は……。」

と云ひながら、何か取りに下へ降りて行きました。

「では、さう／＼一杯食はされたのか？ なかなか近頃は油斷は出来ない！」

斯様小聲で云つて、御飯を食て居ます。





大寒、小寒
幕の風
角で顔える
マツチ賣
朝から一つも
賣れないで
扮雪まちりの
風がふく

憐れマツチ賣よ

童話

正男作



憐れマツチ賣よ

と九歳位の穴だらけの衣服を着て、此寒いのに素足で居る一人の子供が宿屋に来て、

『もしく女中さん!』

『何か用かへ!。乞食は御無用だよ!。汚ない!。』

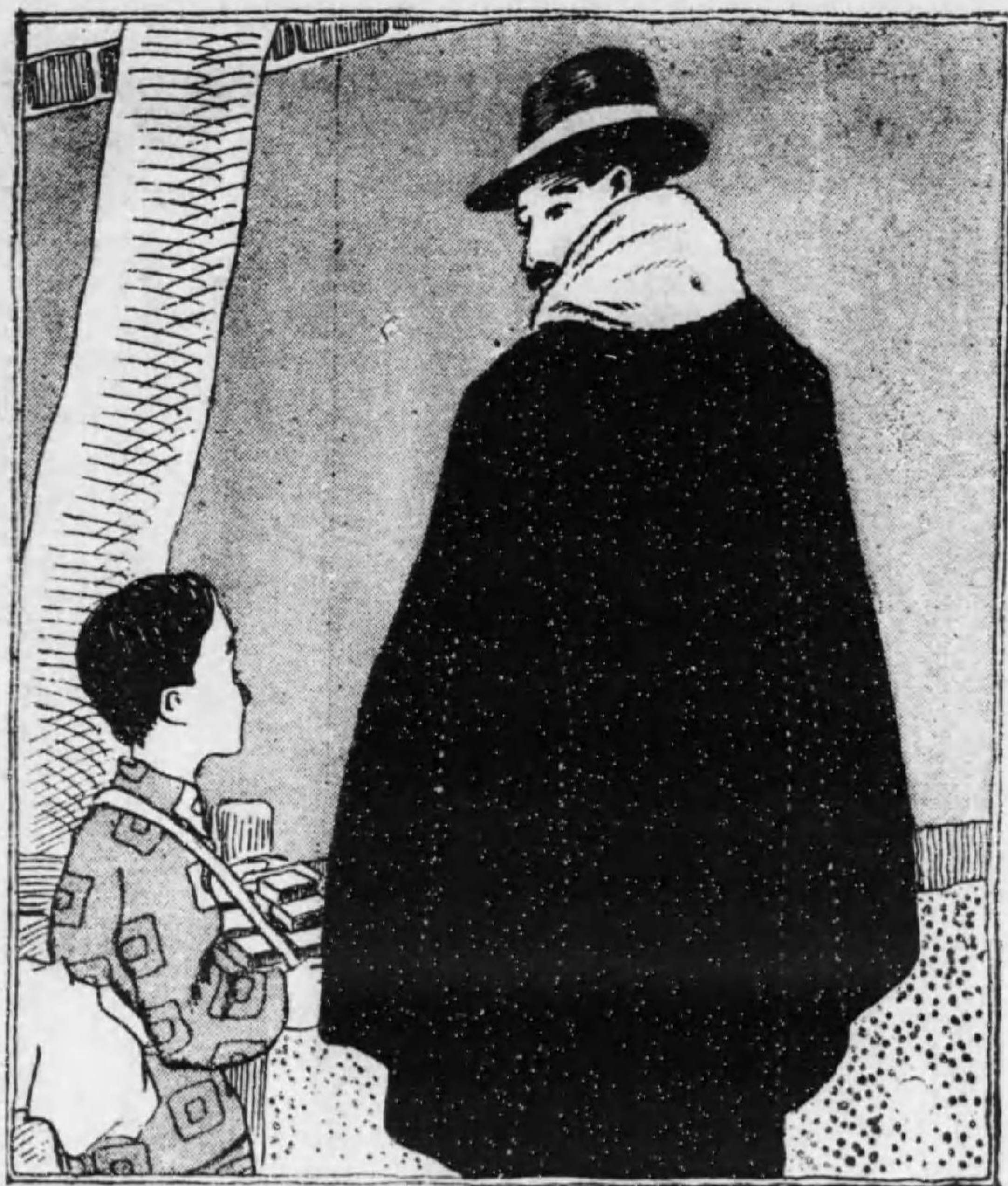
『いね、私は乞食ではありません!。』

『たや、左様かへ、では何か用なの?。』

『私は先刻マツチを買つて下さつた、旦那にた目にかゝりたく参りましたが、此方へたとまりですか?。』

『おや、おまへかへ、いまお夕飯よ。何か用なの?。』

『どうか、先程のお釣銭を持つてまいりましたと云つ



憐れマツチ賣よ

と九歳位の穴だらけの衣服を着て、此寒いのに素足で居る一人の子供が宿屋に来て、

『もしく女中さん!』

『何か用かへ!。乞食は御無用だよ!。汚ない!。』

『いね、私は乞食ではありません!。』

『わや、左様かへ、では何か用なの?。』

『私は先刻マツチを買つて下さつた、旦那に在目にかゝりたく参りましたが、此方へたとまりですか?。』

『おや、おまへかへ、いまお夕飯よ。何か用なの?。』

『どうか、先程のお釣銭を持つてまいりましたと云つ

童 話

憐れマツチ賣よ

正男作

大寒、小寒
暮の風
角で頭える
マツチ賣
朝から一つも
賣れないで
粉雪まぢりの
風がふく



て下さい!。」

「左様かへ!。では一寸お待ちよ!。」

と女中は云ひながら、急いで二階へ上り、

「旦那様、誠に汚ない着物を着た子供が参りました!。」

「あゝ来たか?。」

と紳士は云ひながら下りて来て子供を見ますと、先刻の子とは違つて居りますから、紳士は少しく驚いた風でしたが、其小さな子は、

「あゝ、先程マツチを買つて下さつたのは旦那様でござ
いますか?。どうも先程は有難うございました!。私は

磯れマツチ賣よ



先刻のマツチ賣の弟でありますが、さあ此のお釣錢をお取り下さい。」

と四十九錢のお錢を差出しました。

「お！よく持つて来てくれた。正直に……。」

紳士は夫れを受取りながら、何か不審に思つたのか、

「何故、兄さんが來ないのか?。」

「はい、兄ですか、兄は先程旦那様を買つていたゞきましてから、嬉しさの餘り夫を取替へてお釣錢を返へさうと駈けて來ますと、丁度日本橋を渡つた處で、自働車に轢かれて、足の骨を折られ、頭を傷付けられ、氣絶いた



しました。すると御蔭で巡查の御世話で、其先きの病院に擔ぎ込まれて、お醫者様の御親切なお手當で漸く息を吹きかへしました。先きに其知らせで私が病院に駈付けますと、「茲に四十九錢のおつりがあるから、早くあの松屋におとまりの日那樣へ御届けせよ。」と丸い目をあき、血だらの手で渡しましたから、私は直に尋ねました

が、どうも遅くなつてすみません。」

と云つて泣きながら語りましたから、紳士は云ふまでもなく、宿の主人や番頭や女中も、思はずもらひ泣きをしました。



此紳士は非常に親切な人でしたから、直に其子供と共に、兄の居ると云ふ病院に参りましたが、行つて見ると、寢臺の上に丁度死んだかと思はれるやう、ぐつたりして寢て居りましたので、紳士は其傍によりますと、

『兄さん！オイ兄さん！先きの旦那様がお見えになつたよ！ねね兄さん！兄さん！』

弟が大聲で呼びましたから、兄は眼を大きく開いて、苦しきさうな聲で、

『はい、先程は誠に有難うございました！。どうもお釣銭が遅くなつてすみませなんだ！。お釣銭をかへして私



も誠に安心いたしました！。』

と、とぎれ／＼言ひましたが、又

『私共は此弟と只二人ぎり、た父さんもお母さんも、さうに死んでありませんが、お母さんがお死なさる時にどんな貧乏しても、お前達は決して不正直をしてはいけない！。と云ひましたが、あの旦那様にお釣銭を返して誠に安心いたしましたから、私はもう是なり死んでも宜しう御座いますが、只一つ氣にかゝるのは、此の弟です
が……。』

と云ひながら両の眼から涙が、ポロリ／＼と落ちて、

何となく息がはづむ様に見へました。

「おい！。決して心配するんではないよ！。屹度私が弟を助けてやるから……確かりなさい！」

と紳士が勵ましますと、子供は大きな目を開いて、ニコくと軽く笑ひながら、

「どうも有難う……では宜しくお願い致します！」

と云ひながら、すやくと寝るやうに、弟の手を握りながら、遂に此のマッチ賣の子は息たへたのでありました。



一六 朝寝ぼうの春吉

春吉と云ふ大層朝ねぼうの子供がありました、或朝とりわけ朝寝をするので、

「春やくおい春や！。もう起きないかね？。学校がおくれるよ、春やく。」

ご、おかあさんは呼起しましたけれども、ウーウー云ふばかりで、少しも起きる様子は見へません。

すると、下女のお松は、

「坊ちゃんく！。もうお起きでないと学校におくれま





朝寝ぼらの春吉

すよ！。唯今お隣の増山さんがお呼びでしたよ！。

ご呼びましたが、朝寝ぼらの春吉は、

『イーヨ〜！。今起きるから、左様呼ばなくつても……』

と云ふばかりで、なか〜目が醒める様子も見へませ
んてしたから、

『春や、まご〜して居ないで早く起きないか？ もう

何時だ！。八時すぎぢやないか！。春や！。コレ春や！。』

奥の間で、お父さんが雷の様な大きな聲をして呼びま

したので、其恐ろしい聲と八時すぎと云ふのが聞えて、

吃驚して飛び起き、目をこすり〜時計を見ると、もう

童 話

朝寝ぼらの春吉

正男作



寝坊助、寝坊助

朝寝坊

学校の時間に

お〜かれて

慌て〜途中で

スツテンテン

轉んで頭は

痛だらけ



朝寝ぼうの春吉

すよ！。唯今お隣の増山さんがお呼びでしたよ！。

ご呼びましたが、朝寝ぼうの春吉は、

『イーヨ〜！。今起きるから、左様呼ばなくつても……』
と云ふばかりで、なか〜目が醒める様子も見へませ
んてしたから、

『春や、まご〜して居ないで早く起きないか？。もう
何時だ！。八時すぎぢやないか！。春や！。コレ春や！。』

奥の間で、お父さんが雷の様な大きな聲をして呼びま
したので、其恐ろしい聲と八時すぎと云ふのが聞えて、
吃驚して飛び起き、目をこすり〜時計を見ると、もう



童 話

朝寝ぼうの春吉

正男 作

寝坊助、寝坊助

朝寝坊

学校の時間に

おい〜れて

慌て〜途中で

スツテンテン

轉んで頭は

痛だらけ



二十分前ですから、

『これは大變!』

と顔もろくろく洗はずに、

『サアご飯くく!、お松くく!、お膳くく!』

とむやみにせき立て、御飯もそこくに包みを抱へて家を飛出しました。

春吉は、餘り急いで學校へ駈付けやうとしたものから、途中で下駄の鼻緒がきれて、ころろと向ふへ投出され、其拍子に顔を石へ打付て、額に大きな瘤が出来ました。何時もならおいしく泣いて居るのですが、今日

朝れほうの春吉

は遅いから夫れどころではなく、痛さを堪へて學校へ行きました。

學校へ駈付けて見ると、もう九時が過ぎて課業はとうに初まつて居りましたから、先生をはじめ多數の生徒等は、此あはて、教室に飛込んだ春吉が、びつこをひきながら、額に大きな瘤をこしらへて、泣顔をして居ますから、誰笑ふとなくクス〜と笑ひ出して、とう〜皆な吹き出したのであります。

春吉は恥かしさを堪へて席へ着き、持つて來た包みを開けますと、昨日の本ばかりで、今日のは一冊もありま



せん。

「春吉さん！。今日の學科の御本はどうしました。」と先生から聞かれたので、

「はい！。朝ねぼうをしましたから忘れしました。」

ともまさか言ひかねて、まご〜して居ましたが、遂に何とも言はずに赤い顔をして頭をたれました。

運動の時間になつて運動場へ行きますと、多數の生徒等は飛んだりはねたり、踊つたり走つたり、大層面白さうに遊んで居りますが、春吉は足を傷めて居ますから、只人の面白さうに遊ぶのを、茫然とつまらない顔をして



見て居るばかりでした。

やがて十二時のお晝飯時になりましたから、お辨當を
あけて見ると、今朝餘り急いで来たものですから、空の
辨當を下げて参りましたので、食るものは少しもありません
なんだ。然しきまりが悪いので、朋友には食べた風に見せて、
一日お腹をすかして太層苦しかつたのでした。
其日の午後三時頃、春吉はちんばをひき、額の瘤をな
でながら、た腹をすかして茫然とお家に歸つて來ますと、
お父さんは春吉の様子を見て、

「春吉、今日は時間に間に合つたか？」



「へい〜！」

「へい〜では分らん！。九時に始まる學校を八時四十
分まで朝寝をして、何で間にあふものか？。見よきまり
の悪い、其新しい下駄の鼻緒は切らし、額には大きな瘤
をこしらへ、其上びつこを引いてどうしたことだ！。夫
も是も皆朝寝ぼけをするからだ！。」
と大層叱りましたが、春吉はたゞ

「へい〜！」

と云つて悄然としてゐますので、

「おい春吉よく聞け！。楠正成は『鶏鳴に起きざれば日





暮に悔あり』と云ひ、フランクリンは『遅く起きる人は終日走らざるべからず』と云ひ、英國の諺には『朝の時に黄金充滿す』と云つたが、朝起は大切なもので、昔から偉い人は皆朝寝ぼうではないぞ!』

と父は言葉静かに、よく噛んでふくめる様に云つて聞かせましたから、春吉も深く今迄の朝ねぼうを悔ひて、夫からは早起の春吉となつた云ふことであります。

一七 お鶴の九官鳥

或る日お鶴と云ふ子はお母さんから、一羽の九官鳥を

買つてもらひましたが、此九官鳥と云ふ小鳥は美しいばかりでなく、大層よく人眞似をするもので、少し熱心に仕込みますと、如何な歌でも言葉でもよく眞似るものであります。

お鶴は大層大事に此鳥を飼つて、毎日水や食物をやりましたが、其妹のお千代が少しでも九官鳥を見やうと、籠のそばへ來ますと、いつも恐ろしい顔をして追ひやり、少しも見せないのであります。そして此のお千代と云ふ妹は今年七歳になりますが、生れつきの不具で、跛をひき乍ら歩くと云ふ、誠に可愛想な子でありますの



に、姉のお鶴は夫をいたはらずに、斯様不愛想をするので、全體お鶴は我儘な性質にて、何一つ情深い心を持たぬ事でありました。

諺に顔は心の窓と申しますが、よくよく此のお鶴の顔を見ますと、誠に女らしい優しいところは少しもなく、何時も口を尖らし、額のあたりに青筋を立て、我儘勝手な顔付きをしているのでありました。

だが此のお鶴は、どうかしてあの九官鳥に『鳩ぼつぼ』の歌を教へてやらうと、毎日々々熱心に其籠の前へ座つて歌つて聞かせますが、仲々思ふ様にはまゐりませんか



ら、お鶴はあの我儘で短氣な氣性をむらくと起し、額に青筋を立てて恐ろしい顔をなし、九官鳥を叱り付けますけれども、時には、之れを聞き兼ねてやさしく傍から止める妹のお千代にまで、大層な悪口を申すのであります。

此のお鶴の『鳩ぼつぼ』の歌を九官鳥に教へやうとするのは、大層無理な事ですが、ごうかして夫れでも尙ほ教へやうと、毎日く歌を歌つて聞かせるのを缺かした事はありませなんだ。すると或る日、田舎からお叔母さんがお客にまゐりましたが、此お鶴の様子を見て、





「お鶴さん！。夫に其歌を教へるのは、大層無理ですが、私は前に九官鳥に一つの歌を教へるのに、一年もかゝつた事があります！。だが夫れを教へるには明るい處でなくて闇い處の方が宜い様ですから、何時も籠の上に布か何か掛けて置く方が宜いやうです。」

此の話を聞いてお鶴は大層喜び、夫からは九官鳥を闇い押入の中に籠のまゝ入れて置き、自分は其外に立つて熱心に『鳩ぼつぼ』を歌つて聞かせました。すると日増しに九官鳥は夫を早く覺える様になり、又聲も餘程よくなりましたが、其後毎日教へますと、半年も立つか立たな



いうちに、九官鳥は大層やさしい聲で『鳩ぼつぼ』を歌ふ様になりました。

或る日の事、近所のお婆さんが来て、

「お鶴さん、私の九官鳥が病氣で急に盲目となりましたから、何卒私の九官鳥をあなたの鳥の側に置いてやつて下さい！」

と申しました。いつもなら我儘な心を出して嫌やと云ふのですが、自分の九官鳥が歌を覺える様になつたのを自慢して、嫌いやながら夫を承知したのであります。

ところが、お鶴の九官鳥は、大變親切でありましたか



ら、お婆さんの盲目の九官鳥が来た日から、大層仲よくなつて、自分の口から盲目の九官鳥の口へ餌を入れてやり、又水を飲ましてやり、其外いろいろな親切をして、丁度自分の子供を世話するかの様にしますから、誰もお鶴の九官鳥の親切に感心しない者はありません。お鶴は斯様に自分の九官鳥の親切なのを見て、今まで自分が妹のお千代に大層不親切であつた事を深く耻ぢ、
 「あ、私は今日まで大層悪かつた！。私は人間と生れながら、同じ血を分けた姉で、しかも不具者の妹に、何故彼様に不親切だつたらう？。鳥の九官鳥ですら、盲目の



九官鳥には、あの通り大層親切であるのに……あ、私が悪かつた！。今迄の私の行ひを想へば思ふ程胸がせまつて来る様だ！。

斯様思つたからたまりませぬ。泣きながら直にお父さんやお母さんの部屋へ行つて、今迄自分の悪かつた事をおわびして、側にゐた妹を抱きしめながら、

「お千代さん！」

と云つて眼から涙をポロ／＼と流しているばかりで、何も云へなくなり、遂に其處へ泣き伏して終ひました。するごとお千代は誠にやさしい聲で、



「姉さん！。私は今までのあなたの行爲を何とも思つてはをりません！。姉さんに叱られた時にも、いち悪くせられた時にも、どうか早く姉さんがもつと優しい人になる様にと、いつも神様に祈つたのですよ！。」

と紅葉のやうな可愛らしい小さな手で、泣伏してゐるお鶴を抱き起しましたが、其顔をちつと見て、

「あら、姉さんお顔が變りましたよ！。大層おやさしくて、天使の様に光つて見えますわ！。」

斯様云はれたので、お鶴は部屋に掛けてあつた姿見でよくよく自分の顔を見ますと、成程今までの額にあつた



青筋も、尖つてゐた口も、じゃけんな相も我儘な顔付きもすつかり變つて、大層柔和な同情深い、喜びの色を現はした優しい顔となつてをりました。

「お鶴や！。人の顔は白粉やお化粧水や何かばかりでは決して美しくなるものではありませんよ。顔は心の窓ですら！。心さへ綺麗でやさしければ、誰れでも天使の様に顔は美しくやさしく見へるのですよ！。だから是からは心を清く優しく常にもつて……。」

とお母さんはよく申されたのでありました。

一八 驚 攫 ひ

君男と英哉とは大層仲のよい學友でありましたが、或る日曜日に上野公園へ行つて遊んでをりますと、何處から來たのか、大きな驚か飛んで來て、不意に君男の肩の處を掴みましたから、英哉は非常に驚いて手に持ったステツキで打たうと致しますと、驚は君男を掴んだまゝ、丁度飛行器の様に飛上つてしまひました。

英哉は益々驚いて大聲を上げ、

「ア—い—く—!。」



と呼留めましたが、驚は平氣で君男を掴んで空高く飛去りました。英哉は是れを見て大層心配をなし、顔を青くして一生懸命駈出しながら、夫を家に知らせやうとしましたが、向ふから勇一と言ふ友人が來て、

「英哉君何處へ行くの?。君は大層顔色が悪いよ、病氣かね?。」

「君大變な事が起つた!。今公園に遊んでゐると、驚が來て君男君を拐つたんだ!。僕は夫れを知らせに家へ行くのよ!。」

「君は僕を馬鹿にして居る!。いくら驚が大きいつて、



何て人を拐ふ力があるものか？」

「いや、實際だよ、今僕が現在見たんだもの！」

と言ひ捨てて英哉は直に家へ知らせに行きました。君男のお父さんは、此の知らせを聞いて直に夫を近くの間へ届けましたから、其次の日の新聞は「小供驚にさらはる」と言ふ題で、珍らしい記事を掲げましたから、夫れを誰れもかれも話合ふ様になつて、警察では其事を近くの縣の警察へ電報で知らせる様になし、大層注意して居りました。

すると埼玉縣の秩父の山へ、一人の獵師が獵に行きま



すと、山の頂上に十羽も二十羽も驚が居りますから、

「さて不思議！」

と頂上近くへ登つて見ますと、多数な驚の中に一人の男の子が居ますから、

「おや、是は二三日前に警察から知らせのあつた、上野の公園で驚に拐はれた子供に相違ない！」

と早くも思ひ付きました。

「よし！。俺が助けてやらう！」

獵師は斯様叫びながら銃に弾丸を込めて、五六發撃ちますと、二三羽の大驚は忽ち倒れましたが、其他の驚は



銃の音を聞いて逃げるかと思ひの外、忽ち獵師に向つて其鋭い爪を鳴らしながら攻撃して來ました。一時は此の獵師も驚きましたが、

「何！、おのれ大驚め！」

と夫から盛んに銃を發して、其中の七八羽を倒して、漸く小供を救助け出したのであります。

警察から君男が居たと言ふ電報が、東京へ達しました時、君男の両親は大層喜び、學校の朋友等も、皆々大に嬉んで迎ひに出たのであります。

見ると君男は顔色も悪いことなく、身體も瘦せたや



うではなく、大層元氣でありますから、一同の者は安心しましたが、さて驚の話聞かうと近所の子供や大人が君男の處へ澤山集つて來ました。すると先きに驚が君男を拐つた時、其傍にいた英哉がまづ口を開いて、

「君男君！、あの時、僕がライ〜と呼んだが、聞えたの？」

「僕はそのときは夢中で、少しも何か何だか分らなんだよ！」

夫を聞いた松太郎と云ふ朋友は、

「君、三日も四日も食はずに居て、瘦せないとは實に不



思議だね。」

と尋ねましたら、

「いや、鷺と言ふ鳥はなか／＼贅澤な者よ、決して腐つた物は食べなくて、毎日々々小鳥や魚の新しいのばかり常に運んで食べるのさ。だから僕は攫はれて後毎日のやうに其旨い物を御馳走されたから、此通り丈夫なのよ！」
と言ひましたので、朋友等は誠に不思議だと互に顔を見合つて言ひ合ひました。

お鶴の九官鳥終り

大正十年十二月二日印刷
大正十年十二月五日發行

【定價五十錢送料四錢】

著者 初島 順三郎

東京市淺草區瓦町二十四番地

發行者 中村 惣次郎

東京市神田區豐島町三十四番地

印刷者 小笠原 幸吉

東京市淺草區瓦町二十四番地

發行所 中村書店

(電話下谷四九三一番
振替東京一一六一六番)

童話新集
お鶴の九官鳥

定價五錢 冊一
 送金 料一 冊四 錢
童話新集

第一編	狐の恩返し	第十一編	森の女神
第二編	銀色の小鳥	第十二編	賢い小犬
第三編	小猫大盡	第十三編	鸚鵡さん
第四編	鶏の時計	第十四編	小さい林檎
第五編	山羊のお母さん	第十五編	愛子さん
第六編	蛙の王様	第十六編	お庭の柿
第七編	猿の醫者様	第十七編	あひるの大王
第八編	鴉のお詫び	第十八編	キュービーの眼玉
第九編	お鶴の九官鳥	第十九編	梟の大臣
第十編	小雀三羽	第二十編	おしやべり雀



終